ひと

OPINION LEADER

家庭と仕事のバランスを使い分ける

成功の要因は持ち前のバイタリティー。

P．26、27に対談掲載

東京車検整備㈲代表取締役　油井 ひろ子

御主人と共にゼロから信濃運輸㈱を興し、
更に自らその整備部門である東京車検整備㈲を旗揚げした油井社長。
家庭の主婦として、また母として経営者として、
これまで20年間を歩み続けてきた。
「のんびりした主婦生活は送れない」と
仕事に人一倍やり甲斐を感じている油井社長は語る。
これからも一人三役で、益々辣腕ぶりを発揮するに違いない。

技術力の向上を図り更なる飛躍を

東京車検整備㈲

本社工場　東京都江戸川区谷河内2丁目12番9号
TEL 03-3678-3751㈹
葛西工場　東京都江戸川区臨海町4丁目2番1号
TEL 03-3878-5571㈹

信濃運輸㈱

本　　社　東京都江戸川区臨海町4丁目2番1号
TEL 03-3878-5551㈹

ケイアンドケイエンタープライズ

本　　社　東京都江戸川区臨海町4丁目2番1号
TEL 03-3878-5572

信濃運輸㈱の整備部門として発足、平成６年で創業20周年を迎えた東京車検整備㈲。いわゆる職人気質な技術者集団で、確かで安全な仕事がセールスポイントだ。また親会社に頼ることなく仕事の幅を拡張するなど、実力が認められてこその実績を築いている。培った信頼をベースに、これからも更なる展開を図っていくことだろう。

対談

東京車検整備㈲ 代表取締役
信濃運輸㈱ 取締役
ケイアンドケイエンタープライズ 代表取締役
油井 ひろ子

ゲスト 穂積 隆信

穂積　早速ですが、現在に至るまでの経緯を簡単にお聞かせ下さい。

油井　信濃運輸㈱は主人と一緒にスタートしたのですが、創業して10年ほど経ちますと、お陰様で経営も落ち着いてきました。そんな折、整備部門の必要性を痛感するようになったのです。

穂積　それが東京車検整備㈲さんを興された、そもそものきっかけだったのですね。

油井　ええ。車は生き物みたいなもので、いつ故障するかも分からないでしょう。当初はディーラーさんに対処してもらっていたのですが、夜中にトラブルが発生した時などのことを考慮し、いつ何時でもお客様を第一に考えた対応ができる体制を築くため、自分達で整備工場を持とうと思ったのです。当初は同じ会社の整備部門という形でのスタートでしたが、なかなか難しい面もありました。もっとも実際に踏み切ってみると、頭で描いていたよりはスムーズに運びましたけれどもね。

穂積　しかし大型車の車検となると、準備も大変だったのではありませんか。

油井　そうですね。それ相応の設備が必要になりますからね。また、私自身が申請したのですが、何しろ何も分からなかった状態でしたから、とにかく整備に関するあらゆることを習得するために、品川の整備振興会に何度も足を運びました。また当時は育児もしなければなりませんでしたので、ずっと講習を受けるという訳にはいきませんでしたが、経営者としての立場での技術的なノウハウは、何とか習得することができました。

穂積　家庭も仕事も両立させなければならないということで、申請するまでには、人一倍苦労されたこともあったのでしょうね。

油井　実際に申請するとなると、更に困難なことが多く、かなり苦慮しました。３カ月かけて持込み、それで駄目だったら、もう３カ月、同じ手順を踏まなければならず、特に大型は大変だとつくづく実感させられました。当時は、何故こんなに大変なのだろうと思いましたが、人様の命をお預かりする訳ですから、そのくらい徹底した安全管理が必要だということも、今にしてみれば当然のことだと思います。

穂積　そうした努力が奏功し、今日を築かれたのでしょうね。ところで現在社長は信濃運輸㈱と東京車検整備㈲の２つの事業を手掛けられているのですか。

油井　いいえ。以前は信濃運輸㈱で経理を専門にしていましたが、今は別の方にお任せし、東京車検整備㈲に専念しています。また、子供達も仕事を手伝ってくれていますので心強いですよ。

穂積　それは何よりですね。御子息は、いつ頃からこちらで働かれているのですか。

油井　大学を卒業後はロサンゼルスで勉強し、それから信濃運輸㈱に入ったのです。当時は部長を任せていましたが、そのままでは経営者としての苦労を味わうことができないと思い、グループである㈱ダイトウキョウラインの社長として送り出し、全てを任せることにしたのです。経営者に求められることは、身体で覚えない限り、なかなか身につきませんからね。また、結婚して２人の子供を育てている長女にはグループ会社の㈱葛西物流の社長として全てを任せています。

穂積　東京車検整備㈲さんのお仕事の中で、信濃運輸㈱さんの整備が占める割合はどのくらいですか。

油井　４割程度で、あとの６割は、一般のお客様になります。

穂積　すると徐々に一般のお客様も増やしてこられた訳ですね。

油井　ええ。スタート当初は８割が信濃運輸㈱の仕事で、大型の整備ばかりをしているように見受けられていました。しかし私共はオートバイからダンプまで、全ての整備を手掛けています。また、親会社にいつまでも頼っていては駄目だという意識が強かったものですから、信濃運輸㈱からは一切出資を受けていませんが、社員一丸となって頑張ってきた結果、ここまでくることができました。

穂積　やはり人材は財産ですよね。

社長は経営者として人一倍努力なさっていますが、家庭の主婦に戻りたいとお考えになることはありませんか。

油井　これまでに、1年くらいのんびりと主婦生活を楽しみたいと思ったことがない訳ではありませんが、(笑)私は20代の頃から仕事をしておりますので、自然と仕事のことで頭がいっぱいになってしまうのですよ。

穂積　それだけお仕事がお好きなのでしょうね。

油井　そうかも知れませんね。出産した時も個室にして頂き、電話を引いて仕事をしていたくらいですからね。(笑)

穂積　ほう、それは凄いですね。御主人は、こちらの経営にはノータッチなのですか。

油井　ええ。経営上のことは特に何も言いませんし、全て私に一任してくれています。

穂積　それにしてもお忙しいようですが、お身体の方は大丈夫ですか。

油井　幸いなことに、病気一つしないのです。最近は「俺の代わりにゴルフに行ってくれ」「冠婚葬祭に参列してくれ」と、主人の代理を務めるくらいなのですよ。(笑)

穂積　(笑)御主人もお忙しくされているのでしょうね。

油井　ええ。役職が多過ぎて、いろいろと忙しいようです。

穂積　月並みな質問で恐縮ですが、社長のお仕事に対する信念・信条についてお聞かせ下さい。

油井　何事も辛抱すれば、いつか必ずそれが希望に繋がるということです。目標を持つということは、生活にも張りを与えてくれます。

穂積　これまで、不屈の精神で努力を続け、そして今日の成功を掴まれた訳ですものね。

油井　ええ。お陰様で、平成6年で20周年を迎えることができました。

穂積　ほう、20周年ですか。お子さんを育てながら、そして家庭の主婦として、20年間も経営者を続けてこられたそのバイタリティーに敬服致しますよ。

油井　確かに、これまでには自分でいつ寝たのかも分からないといったような時期もありましたが、それでも健康でいられたからこそ、今日があるのだと思っています。

穂積　健康は全ての資本ですものね。

油井　その通りです。また、人間というのはうまい具合いにできているもので、嫌なことはすぐに忘れてしまうものですね。(笑)ですから、取り立てて苦労したという覚えはないのです。

穂積　それは、社長の常に前向きな性格によるところが大きいのだと思いますよ。

これまでに成長された要因について、どのようにお考えですか。

油井　人に恵まれたことが大きいでしょうね。それが励みになり、また仕事の原動力にもなりました。従業員にしてもお手伝いさんにしても、そして主人にしても…。お陰で仕事が嫌になることは一度もありませんでしたからね。

穂積　本当にこのお仕事が好きなのですね。社長御自身は、従業員さんにどのように接しておられるのですか。

油井　時には、きついことを言うこともありますよ。しかし、すぐに忘れてしまうのです。(笑)かなり厳しく怒っても、ものの5分もすれば、いつものように話しかけたりしています。(笑)

穂積　では最後に、これからの会社としての展望や抱負、また社長御自身の夢について伺って、お話の締め括りにしたいと思います。

油井　景気が回復しつつあると言われていますが、まだまだ見通しは不透明です。そのような中でこれからは技術の仕事、またどちらかと言えば表舞台に出ない仕事が、脚光を浴びるようになると思います。ですから技術力の向上を目標に、更に会社としての基盤を強固なものにしていきたいと思っています。

穂積　車社会がなくなることはありませんから、今後も需要は伸びていくでしょうね。

油井　ええ、そう思います。それと同時に、未だに車輌整備管理に対して古いイメージを持っておられる方に、考えを改めて頂けるよう努力したいと思っています。最近では「技術は自分の大きな財産だ」という認識を持ち、大卒のエリートの方もこうした業界に着目するようになって、「修理屋」というイメージは希薄になりつつありますから、業界全体のイメージアップを図っていくよう尽力したいと考えています。

穂積　これからも御主人共々、頑張って頂きたいと思います。

本日はお忙しいところ、まことにありがとうございました。

社長の努力が奏功し、今日を築かれたのでしょうね。

これまで20年間歩み続けることができたのは、人に恵まれたからだと思います。それが励みになり、また仕事の原動力にもなりました。従業員にしてもお手伝いさんにしても、そして主人にしても…。お陰で仕事が嫌になることは一度もありませんでした。